

## 「日本と日本文化に関する」調査についての報告

著者	王 敏
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	6
ページ	21-37
発行年	2009-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15002/00022603">http://doi.org/10.15002/00022603</a>

# 「日本と日本文化に関する」 調査についての報告

王 敏

## I、調査概要と目的

法政大学では、2007年度から2009年度までの3年間、日本政府（文部科学省）の事業である「学術フロンティア推進事業」の一環として、異文化としての『日本学』を推進する研究プロジェクト（研究代表 星野勉教授（法政大学国際日本学研究所所長））を実施している。この研究プロジェクトは、比較文化論を方法とし、混成文化である日本文化を、アジア全体の中に位置づけることをねらいにして実施するもので、「異文化としての日本」の活動の一環として、東アジア文化研究をテーマとした研究会（東アジア文化研究会）を開催するほか、ワークショップや国際シンポジウムの開催、資料集・論文集の刊行（外国語の翻訳版も含む）、日本文化や日本研究に関するデータベースの構築などを計画している。

初年度の2007年度においては、中国の日本学研究者を対象にしたアンケートを行い、中国在住の日本学研究者が、日本と日本文化についてどのような認識をもたれているのか、日本と日本文化研究を開始された時点から現在に至るまで、日本と日本文化の「何に」、「どのような関心」をもたれて、日本・日本文化と研究者の属する文化の相違点を明らかにすることで、内外の日本学研究者が関心を抱くテーマの発見とそのテーマについて探求を行っていきたいと考えている。

東アジアの日本学研究者が日本・日本文化について抱く理解困難なことを明らかにし、その解明に向けての出発点を明らかにする本研究プロジェクトは、今後、東アジアの日本学研究者と日本の研究者間の共同研究の推進やネットワ

ークの構築にも資することが期待されよう。

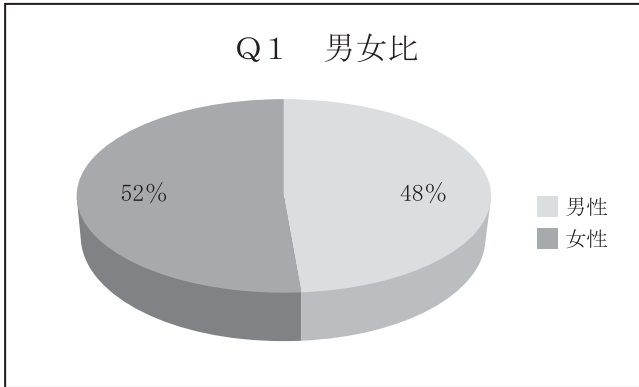
本調査は、サブ・プロジェクト②東アジアの日本文化研究プロジェクトが担当している。当研究プロジェクトが2007年10月～2008年2月の間に中国の日本学研究者を対象にしたアンケートを行い、第一次事例調査をしてきた。

本事例調査の特徴は、第一に、日本研究領域（社会文化中心）の調査内容を社会科学の手法を導入、活用して日本研究のさらなる可能性を探求する。第二に、文化研究の方法論として、奥ゆきと広がりを持たせるために、社会科学などの他分野に学ぶ必要性を感じ、その点から研究を行おうとする試みである。第三に、本事例調査の対象者は、院生以上を対象にしたものであり、国際日本学研究所とネットワーク関係が構築されている。第四に、アンケート調査以外にも、中心となる人物、複数人を対象にしたインタビューも並行して行っている。

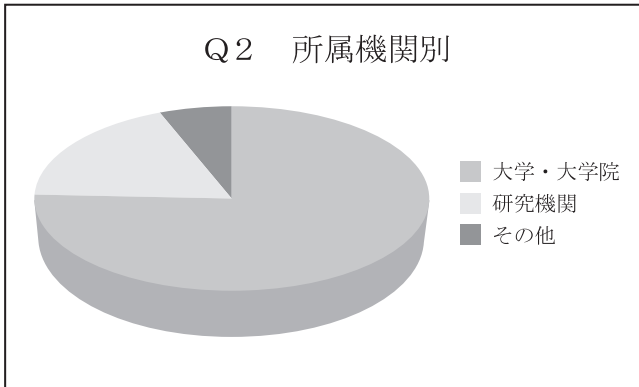
また、当調査はアンケートの手法を取っているが、統計学における数理的な代表性に基づいて行われたものではない<sup>(1)</sup>。そのため、標本数（有効回答数33名）が少なく、代表性に対する疑問が残るため、統計学的信用性を欠く可能性があり、主観的、恣意的であるという批判は免れない。本来、統計学上母体となるべき日本学・日本文化研究を行っている東アジア在住の全研究者への調査、もしくは標本調査として無作為抽出法による調査手法を取るべきであるが、極めて少数の対象への調査のみしか行えなかった。こうした事態が発生した要因としては、アンケート回収期間が中国の大学での休暇期間であったことで回収率が低くなってしまったこと、プライバシーの懸念から回答拒否、論文での独自性の維持のための機密保持、アンケートの内容が抽象的で理解しにくい、こうしたアンケート調査が歴史的に定着していない<sup>(2)</sup>、日本語能力の問題、今までの日本に関する調査面での弊害など——と分析している。これらの点に対する反省を生かして、調査手法、設問も含め次回以降の課題としたいと考えている。

## Ⅱ、調査結果について

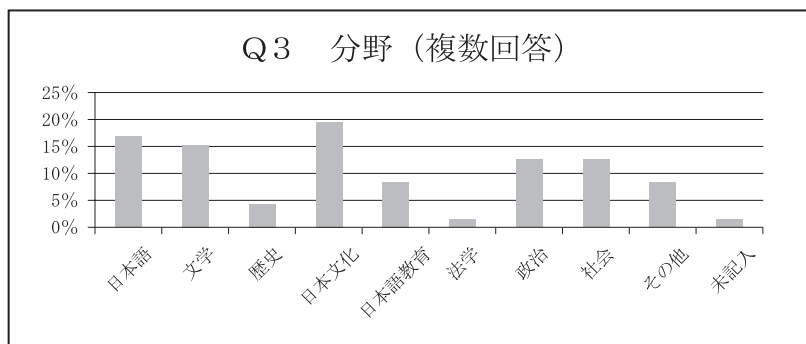
### 1. 男女比（男性 16 名 女性 17 名）



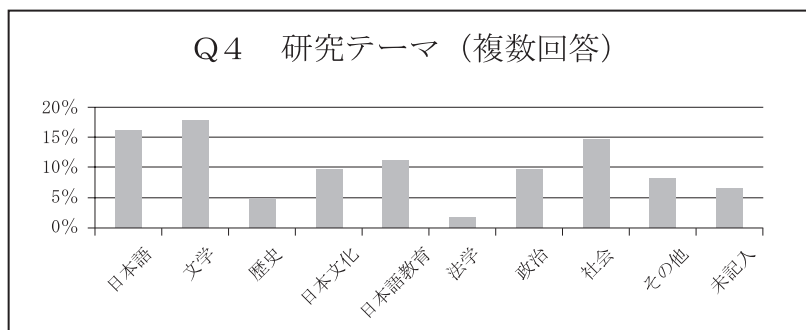
### 2. 所属機関（大学・大学院 25 名 研究機関 6 名 その他 2 名）



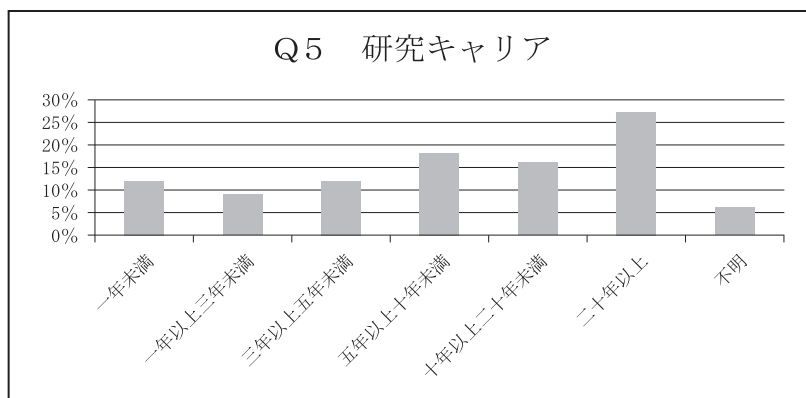
### 3. 分野（複数回答可 回答総数 72）



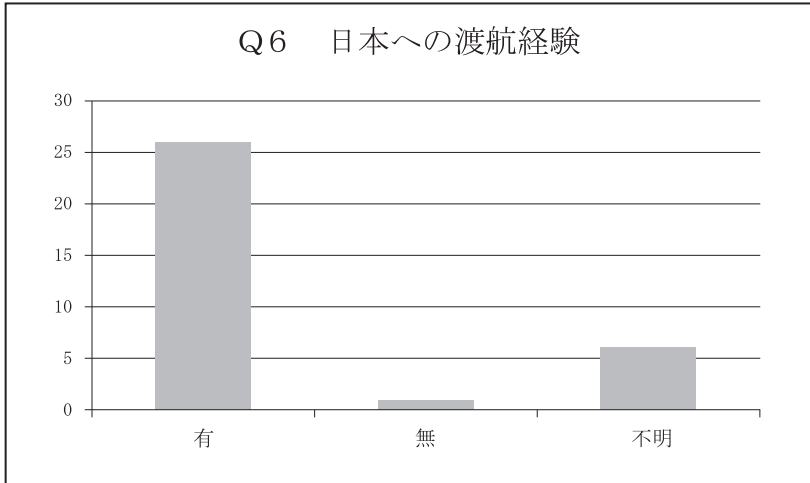
### 4. 研究テーマ（複数回答可 回答総数 62）



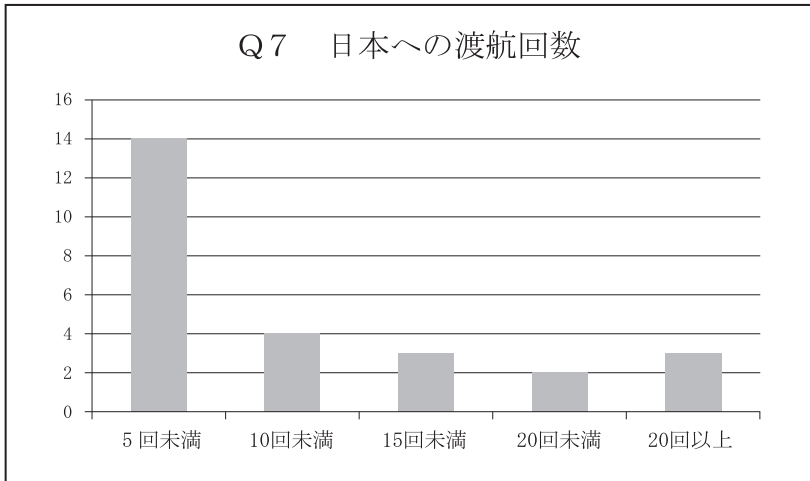
### 5. 研究キャリア



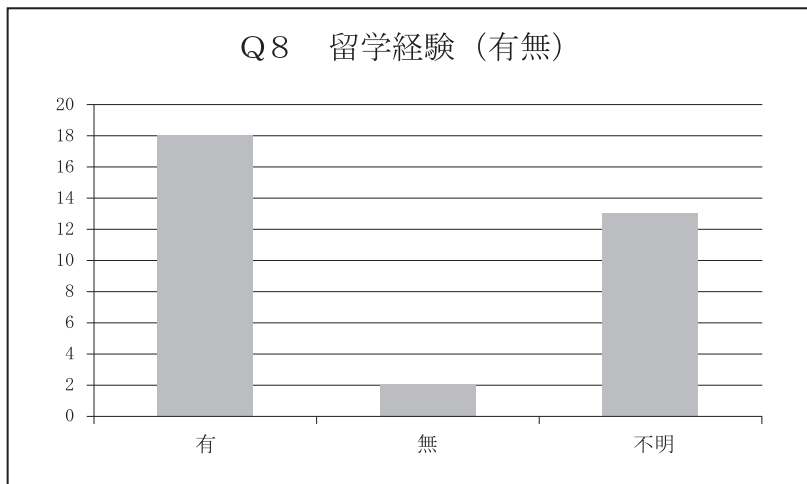
6. 日本への渡航経験（有 26 名）



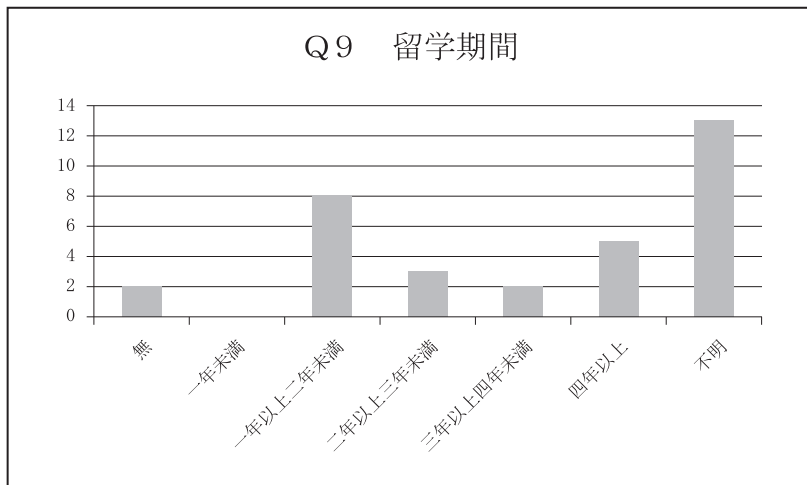
7. 日本への渡航回数（6 で渡航経験が有と答えた 26 名の回数別）



## 8. 日本への留学経験



## 9. 留学期間



## 設問回答編

◎回答 1 相違点に関するキーワードと内容（個々の回答事例について、別途データ集参照のこと）

キーワード	説明要約（一部抜粋）	回答数
同じ黄色人種		1
同じ漢字文化圏に属する		1
同じ近代化・欧米化を進んでいる	・ 明治維新後の発展	2
（日本人の）人間関係	・ 集団への適応	1
（日本人は）まじめ・細かすぎる		1
（中国人は）おおらか・いい加減		1
（日本人の性格が）曖昧	・ 桜と侍の対比において ・ 態度と精神の矛盾 ・ 表面にこだわる ・ はっきりものを言わない	3
（日本人は）規則正しい	・ 礼儀正しい	2
敬語		1
日本語の曖昧さ	・ 日本語らしい日本語が上手に使えない場合が多い	4
日本語の漢字と中国語の漢字		1
水に流す		2
日本語教育		1
言語心理		1
コミュニケーション	・ 両国間のコミュニケーション不足による誤解 ・ 日本人の内外における態度	2
飲食文化		1
贈り物文化	・ 感謝の気持ちと価格においての国民性の対比	1
歴史（歴史認識）	・ 中日問題との関連	4
理解		1
摩擦		1



キーワード	説明要約（一部抜粋）	回答数
忘年会	・日本人特有の破線的な時代観と密接にかかわっている	1
未来志向		1
言語文化		1
価値判断の曖昧さ		1
自然志向	・日本人は自然を愛する気持ちが世界中でもっとも強い民族 ・感受性の違い	4
重層文化		1
甘え		2
死生観		1
思惟様式		1
共同体意識	・古代から近代に至るまで日本を貫いてきたものである	1
無常観		1
尚武		1
矛盾		1
消極的な美感		1
異文化の受容	・異文化との共存 ・文化の重層化	4
共存		2
（文化の）融合		2
茶道		1
武士道		1
伝統文化の重視		1
日本人の名字		1
（日本人は）感性重視	・日本人はエモーショナルリスト	1
生活習慣		1
あいさつ		1
サービス業		1

キーワード	説明要約（一部抜粋）	回答数
集団意識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 血縁意識との対比</li> <li>・ 中国人は個人的に自由的でロマンチックな人間性、日本人は自分自身の位置を確かめながらコミュニケーションしている</li> </ul>	4
右翼団体		1
差別		1
権威主義	・ 学校の教員用トイレを例に	1
礼儀作法		1
国民性		1
高齢者の宗教信仰	・ 日本の高齢者はほとんど宗教信仰を持っていて、中国との対比	1
老後の家庭扶養と社会福祉		1
終末期医療		1
社会構造		1
日米同盟	・ 戦後日本の方向を規定してきた	1
中日関係	・ 歴史問題との関連	1
歴史教育		1
天皇		1
縦社会の人間関係		1
回答不能		1
未記入		2
総計		87

◎回答2 相違点とその理由(個々の回答事例について、別途データ集参照のこと)  
(設問内容) 違いを感じる点やその理由についてのコメント

相違点	理由(コメント)	回答数
尊敬語と謙譲語	・(日本語は)人間関係によって言葉を変化させるため	2
言葉が曖昧で理解しにくい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中国語は言語依存型、日本語は言語不依存型である</li> <li>・コミュニケーションにおいて、中国語は意図を明確で単刀直入に表現するが、日本語では相手の意図を察することが重要視される</li> <li>・日本人は言葉も性格も曖昧である、中国人は率直である(その原因は、日本の自然環境、思考様式の差異)</li> <li>・友人関係で友達の足りない点を指摘する中国人、自分の意見を言わない日本人</li> </ul>	5
漢字の混同		1
日本文化と異文化の関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最終的には日本の特色を持つ文化に変化させる</li> <li>・日本文化の持つ異文化との融合性</li> <li>・日本文化は異文化をすぐに吸収するが、時間の経過と共に、抵抗感を感じる(速熟)。一方で中国は長い時間をかけて抵抗感を消す(遅熟)。</li> </ul>	3
まじめとおおらか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一般的と大体などの文献使用による差異</li> <li>・イデオロギーからの対比例</li> </ul>	2
にぎやかさと静か	・中国人はにぎやかで日本人は静か	1
自然・自由と潔さ	・中国人は自然・自由、日本人は潔さ	1
個人主義と集団主義	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中国人は個人主義者、日本人は集団主義者</li> <li>・日本の国土・風土面での民族意識形成について</li> </ul>	2

相違点	理由（コメント）	回答数
面子と合理性	・ 贈り物の場合、中国人は贈り物の値段に感謝の気持ちが比例、日本人は普段使う物で値段は高くない	1
歴史問題	・ 両国間の交流が円滑に進まない根元	1
歴史観	・ 歴史の持続を重視する中国人、歴史を忘れる日本人（例として、忘年会、日本語の未来形と過去形、伊勢神宮の遷宮など） ・ 相互理解の必要性	3
歴史教育	・ 歴史教育の力点の違い（例として中日両国の学習教材に登場する人物数と年代による比較）	1
日本語の特色	・ 事象への深層的理解の困難	1
言語	・ 事象への深層的理解の困難 ・ 日本語の談話は「協調型」、中国人の談話は「自己主張型」という傾向が見られる	2
人間の世界観	・ 事象への深層的理解の困難	1
価値観	・ 事象への深層的理解の困難	2
思考方法の違い	・ 事象への深層的理解の困難	2
伝統的観念の観念	・ 事象への深層的理解の困難 ・ 伝統的発想や従来の既習の影響からくる差別意識など ・ 中国の発展に伴う伝統的生活への変化	3
文化	・ 事象への深層的理解の困難。言語面での発想法の相違から ・ 日本文化の重層化現象への疑問 ・ 相互理解が不十分 ・ 伝統文化の影響 ・ 日本はプラグマティズム的である ・ 美意識の差異 ・ 中国文化は多面的であるが、日本文化は集中的で繊細である ・ 風土面での影響から日本文化の集中性の面があげられる	10

相違点	理由（コメント）	回答数
親族関係への認識	・ 中国の大家族主義と違い家族の概念が薄い	1
人間関係	・ 人間関係が希薄（例として友人関係） ・ 日本人は中国人より対人配慮意識が強い	2
規範意識	・ 例として、駅ホームにおける整列	1
視野の範囲	・ 日本人は比較的視野が狭い	1
発想法の違い	・ 例として言語面から	1
感性を重視する	・ 日本文化は感性を重視する、中国文化は理性を重視する（例としてイデオロギー）	1
自然崇拜	・ シャーマニズム的自然崇拜	1
共通事項が多く発見不能	・ 長年日本で生活することで特異性よりも共通事項が多く、中国と比較すると共通事項の方が多い	1
感情移入の欠如	・ コミュニケーション上の障害になる	1
誤解、先入観	・ コミュニケーション上の障害になる ・ 無知、無責任な発言による対立（例としてインターネット）	2
社会制度		1
国民性		1
教育		1
生活習慣	・ 食事面における差異 ・ あいさつの差異	2
未記入		4

◎回答3 理解が困難な点の影響について（個々の回答事例について、別途データ集参照のこと）

（設問内容）③上記の点（日本・日本文化の理解が困難な点）は、あなたが日文学研究を行うに当たって、どのような役割や影響を与えていますか。

影 響	回答数
理解困難での間違い	1
言葉遣いの正確さ	1
勤勉さ	1
困難は克服済み、慣れる	3
特になし	2
文化・習慣の尊重の必要性	1
歴史問題の影響	2
思考様式の差異	2
言語の捉え方	2
文化の捉え方	1
幸せや楽しみに変化させた、研究意欲の向上	10
バッシングの問題	1
日本人との交流不足、相互理解不足	2
日本文化への理解の向上、交流を増やす	2
研究をさらに進める、研究の発展	3
先入観の克服	2
未記入	4
回答不能	2

## ◎回答 4 支援連携に関して

(設問内容) あなたの日本学の研究活動を進めていく上で、法政大学の間で交流・連携が期待できるものがあれば、ご教示ください。

回答項目	内 容	回答数
四川外語学院との交換留学生		2
教員研修	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 法政大学より教員の派遣、四川外語学院からの教員研修</li> <li>・ 客員研究員希望</li> <li>・ 教員育成</li> </ul>	4
日本語学の支援活動		1
日本語教育の支援活動		1
研究者間の交流	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 交流・連携の希望</li> <li>・ 中日両国以外の国の研究者とも連携</li> </ul>	4
学際的・多角的研究の主催		1
共同研究希望		3
研究史の整理		1
中日新聞事業促進会との共同研究		1
資料・論文などの研究資料提供		2
短期訪問	3～6ヶ月程度	1
国際シンポジウムの共同開催	・ 四川外語学院日本学研究所との共同開催	2
研究会・シンポジウムの情報提供		1
日本学研究者による講座の開催		1
未記入		16

### Ⅲ、調査結果についての分析

第一回の調査であることに加え、回答数が少ないため推測の域を出ないが、上記の3研究分野と4研究テーマとも、複数回答してもらったものを分野・テーマごとにデータクリーニングした結果である。そのため、詳細な個別的なテーマから、大きな課題まで幅広い回答が得られたが、全体の傾向をつかむためこのような形にしてある。このグラフから、従来から言われている日中関係、日本政治に偏った日本研究だけでなく、日本語・日本文学・日本文化など広い分野で研究が進んでいると推察できる。それは、回答編2での文化の相違点についての認識でも幅の広い回答が示されている点からも併せて推察できるであろう。

また、調査対象者の研究キャリアが比較的少ない人間（10年未満の回答者の総計）が52%を占めており、その研究年数に比例して渡航経験・留学経験の有無が関連していると推察される。渡航経験に関しては、渡航回数が5回以下と少ない回数が一番上位を占めている点からも、渡航経験・留学経験と研究年数とは相関しているように思われる。こうした点から、上記の回答編4での連携に期待するものという設問に対する回答では、交換留学生や教員派遣といった交流を求める回答が多く出されていた点と併せて、研究面での交流の増加を期待しているものだと推測されるのである。

総じて言えば、中国においての日本学研究者の興味関心は、多元化・多面化の方向に移行しつつあるように感じる。従来からの日本学研究における偏重した研究から、回答編2で得られた多数の意見のように、日本文化の他文化への関係性（吸収方法や吸収速度なども含めて）など、日本文化が持つ多様性や関係性など、多面的な分野にも注目が集まっているように思われる。

本調査結果は、まだ第一回の調査結果であり、こうしたより深い検証については、さらなる調査、研究を検討したいと考えている。

調査には多くの方々の協力をいただいた。とくに法政大学の特任教授杉長敬治、法学部教授菱田雅晴、同学部博士課程の杉田徹諸氏及び国際日本学研究所学術フロンティアサブ・プロジェクト②「異文化としての日本」のメンバーの方々には感謝する。



## 注

- (1) 調査対象研究者数（母集団の大きさ）を推定するのに使った先行研究は、国際交流基金日本研究調査 1995/96 である。この調査は、すでに 10 年以上経過しているため、便宜上この数を最低必要な数としている。韓国の日本研究者数は 593 人、中国の研究者数は 1260 人、1853 人と推測される、この数字から必要な母集団の大きさ（要求精度 5% 信頼度 90% で計算）は、237 人分だと推測している。
- (2) 現在、中国では、社会科学院を中心とした統計調査が行われていて、毎年『皮書』シリーズ等の形で研究成果を残しているが、それらが行われているのは近年来的なことであり、そのような点から本事例に対しての認識の差異が存在し影響を及ぼしたと推察している。

## 参考資料

## ・協力機関一覧

中華人民共和国国務院発展研究センター  
 中国社会科学院日本研究所  
 北京大学 国際関係学院  
 北京外国語大学日本学研究中心  
 中国人民大学学語学院  
 四川外国語学院  
 西安交通大学  
 大連・東軟情報学院  
 洛陽外国語学院  
 中国広東湛江師範大学  
 浙江工商大学  
 重慶交通大学  
 重慶師範大学  
 中国新聞社

## ・凡例

・氏名・性別・所属・研究歴・専門分野・研究テーマ・留学歴・連絡先

## ・質問回答○質問 日本・日本文化について

あなたの所属する（生まれ、育った）国・国の文化と日本・日本文化は、共通点もあるでしょうが、同時に、両国・文化の間には大きな違いや理解が極めて困難と思われることがおありだと思います。

あなたにとって、それは、どのような点でしょうか。

以下の内容についてお答えください。

①その内容とキーワード（キーワードを 3 つ程度あげてください）

（キーワード）

（内容）

②違いを感じる点やその理由についてのコメント

③上記の点（日本・日本文化の理解が困難な点）は、あなたが日本学研究を行うに当たって、どのような役割や影響を与えていますか。

④日本学研究所と支援活動

あなたの日本学の研究活動を進めていく上で、法政大学との間で交流・連携が期待できるものがあれば、ご教示ください。

<ABSTRACT>

## **Report on the results of a survey of Chinese research on Japan and Japanese culture**

WANG Min

This preliminary survey was conducted by the members of Sub-project 2, “Japanese Studies in East Asia.” Questionnaires were distributed to researchers of Japanese studies in China between October 2007 and February 2008. The following are some of the features of the survey. First, it explored the potential of research on Japan by adopting and employing social science methods when conducting surveys on fields relating to Japanese studies (centering primarily on society and culture). Second, it attempted to bring depth and breadth to its methodology for cultural research by recognizing the necessity to learn widely from the other social sciences, and conducting research based on that understanding. Third, the respondents of the survey consisted of scholars from the graduate level up, who have now become part of the network being established by Hosei University’s Institute of International Japanese Studies. Fourth, in addition to the questionnaire, interviews were conducted with several key figures in the field.